

ヤマユリ（ユリ科）

観察のポイント

高さ1～1.5メートルになる日本特産のゆりです。種をまいてから5、6年でようやく花を咲かせるようになります。自然の家のヤマユリも、毎年種をまき増やしてきました。花は大きく15～20センチもあり、白い花の内側には赤い小さな点がたくさんあります。とてもよい香りがしますので匂いをかいでみよう！

コオニユリ（ユリ科）

観察のポイント

おしべの先端のヤクが、ちょっと触れただけでくると簡単に回ってしまいます。これは、花粉の付きにくいチョウの体にヤクがびたりとくっついて、たくさん花粉が付くようにするしくみです。いっぽう、めしべの先端は粘液で湿っていて、運ばれてきた花粉をしっかりと受け止めます。キアゲハが花粉を運びます。

オミナエシ（オミナエシ科）

観察のポイント

日本の秋を代表する花ですが、野原ではなかなか見られなくなってしまいました。八ヶ岳では草原が少なくなってしまい、植林されたカラマツ林ばかりが多くなってしまった結果、オミナエシやキキョウのような日当たりの良い所に生える植物は少なくなってしまいました。

ワレモコウ（バラ科）

観察のポイント

とても地味な花で花が咲いても咲いているようには全く見えません。種になっても同じ色をしているので分かりにくいです。小さな花がびっしり集まっています。一つ一つの花がどんなか見てみましょう。

エゾカワラナデシコ（ナデシコ科）

観察のポイント

園芸種のカーネーションと似ていますが、仲間は近いけれど別の種類です。八ヶ岳で見られるのはほとんどがエゾカワラナデシコです。カワラナデシコは八ヶ岳より暖かいところにさきます。エゾカワラナデシコは少しガクが短く、花びらの切れ込みが少ないです。

キキョウ（キキョウ科）

観察のポイント

いくつかの花の中心を観察してみましょう。花によってめしべやおしべの形が違うことに気づきます。おしべが花粉を出す時期と、めしべが花粉を受け取る時期をずらすことによって、自分の花粉で受粉しないよう工夫をしているのです。ハナバチが花粉を運びます。

フシグロセンノウ（ナデシコ科）

観察のポイント

名の由来になった茎を良く見てみましょう。節が黒ずんでいます。暗い森の中でこの花が咲いていると、そこだけパッと明るくなったような感じがします。まるで園芸植物のような華やかな色ですが、れっきとした日本在来の植物です。

マツムシソウ（マツムシソウ科）

観察のポイント

花を何個も見てください、咲きはじめてから種までさまざまな段階で、どれもおもしろい形をしています。外側の花と、中心の花とでは花びらの形がちがいます。種は丸い形をしていて、巡礼の人が使う鐘の「松虫」に形が似ているので名が付いたといわれています。

